し、機能が充実した火葬場にしていった結果でもあるので、単純に激減しているとはいえません。ただ過去1年以内に稼働実績があるのは1453か所にとどまります。人口が集中している都市部では、死者数も当初の計画より増え、火葬までどうしても日数がかかるようになっています。

とはいえ、敷地の問題もあって受け入れ数を増やすにも限界があり、近隣住民の理解を得るのに時間を要すので、簡単に建設できるものではありません」

そんななか火葬場ではさまざまな検討がなされているという。

「火葬の受け入れ数を増やすために、焼香や読経禁止、焼骨確認を省くといった火葬場も

愛する人をちゃんと見送ることで人生には〝さよならの力〟が宿る

そういった意味で、遺体ホテルが果たす役割への期待は大きい。

前出の竹岸さんによれば、

『そうそう』に運ばれてくる遺体の平均年齢は60才前後。高齢者ばかりというわけではなく、いちばん低い年齢では2才の子供もいたという。

「ここの利用者は、火葬までご遺体を安置する場所がなくて困っている人ばかりではありません。幼いわが子を亡くしたことや自殺した家族のことをご近所に知られたくない、というかたもいらっしゃいます。またこうしたご遺族のなかには、ただでさえ愛する人の死に傷ついているのに、親族から『なぜもっと早く病院に連れていってあげられなかったのか』『なぜ気づいてあげられなかったのか』などと責められることもあって、自分自身をも追い詰めてしまう場合があります。ひとまずその死を受け入れる時間を過ごすためにこちらを利用されるかたもいらっしゃいます」

神奈川在住の千葉久枝さん（60才）は、1月4日に、長男の隆史さん（38才）を肝臓病で亡くし、その日から1月9日の通夜までの6日間、『そうそう』を利用した。

「息子は自営で設備関連の仕事をしていたんですが、そんなに浴びるほどお酒を飲むタイプではありませんでした。

出できています」（武田さん）

火葬後に行われる『骨上げ』は、会葬者が箸で遺骨を拾い、骨壺に納めることですが、故人が亡くなったのを受け入れるといった意味合いがある。また地域によっては故人があの世へわたれるように橋渡しをするという想いが込められている。

「しかし最近は骨をいらないという人も増えています。火葬の受け入れ数を増やしたり、運営効率優先のため、こうした儀式がなくなる可能性も否定できません。

そもそも欧米では、宗教的な考えの違いもありますが、火葬に立ち会いません。炉に入るところも見ませんし、遺骨も、火葬場職員が集めて後日郵送するか、後から遺族が取りに来るといった形です。

多死社会のなかで、現状の火葬場の受け入れ数を高めるため、こうしたこれまでの日本ならではの死者の送り方が、見直されていく可能性があります」（武田さん）

何事にもお金と時間をかけることに価値を見いださない現代社会では、恋愛や結婚さえコスパで考える人が増えてきた。そうした人たちにとって、死者のためにお金と時間を費やすことは、なんともばかばかしいことなのかもしれない。

葬儀はやらず、お墓も作らない。そうしたなかで迎える多死社会では、もしかしたら「さよなら」までも、簡素化していってしまうのかもしれない。

ただ仕事のつきあいで、いろいろそういった機会がありました。

でも肝臓が悪いといって入院した1月1日にお見舞いに行ったら『うるさい』とか言われて元気そうでしたし、2日も調子よくてね。でも3日には『ええ？　何があったの？』というような状況で、もう酸素マスクをしていて話もできない状態になっていました。それでも死ぬなんて思うことはなくて、『じゃあ、先生、次はこの注射を打ってください』とか、そういう話をしていたんです。だから亡くなったときは何が起きたのかまったくわからなくて…」

心構えをする間もなく逝ってしまった息子を前に呆然と立ち尽くす千葉さん。しかし悲しみに打ちひしがれる間もなく病室には葬儀会社のスタッフがせわしなくやって来た。

「病室から霊安室まで連れて行っていただいたところで、『どこで葬儀しますか？　うちでしますか？』と聞かれました。病院から紹介される葬儀会社は高額だという話を聞いたこともありましたし、ここで頼んでしまうと、もう息子に会えないと思ってお断りしました。通夜まで時間があったので、その間、息子をどうするのか聞くと、冷凍庫に連れて行かれ、次に息子に会いたいと思っても、その冷凍室の前で手を合わせるくらいしかできないと言われたものですから。…でも、お断りしたら、『じゃあ、あと30分で出てくださいますか』と言われたんです」

そう言われても、息子の遺体を安置する場所にあてなどない。

「このまま私は、息子とさまようことになるのか…」

大きな絶望のなか、千葉さんは知人の紹介で『そうそう』を知った。

「いつでも好きなだけいてください」とおっしゃってくださって、早朝でも深夜でも対応してくださいました。だから、息子の友達も、北海道から沖縄まで、各地で仕事をしてらっしゃったんですが、たくさんのかたが時間を見つけて駆けつけてくれたんです。

家族の形や宗教とのかかわりが変化するなか、こうした墓参りの光景も失われつつある。またお墓や葬儀を不要とする「ゼロ死」への関心度も高まっている。（写真はイメージ）

息子が亡くなったことを聞いて名古屋から車を飛ばしてきてくださった高校時代の後輩は、深夜2時頃に『そうそう』に着いたんですが、そのまま息子に会って、仮眠して、朝、『仕事があるから』ととんぼ帰りしていました。自宅ではここまでなかなか対応できませんよね。

仕事関係のかたも『もう少し一緒に仕事をしたかった』と話してくださって…たくさんのかたにお会いして、お話しすることができました。あぁ、息子は本当に人に恵まれていたんだなぁって、そんなことまで知ることができて…ありがたいですよね」（千葉さん）

隆史さんには妻との間に、高校2年生、高校1年生、小学1年生の3人の子供がいるが、6日間、ずっと、父親のそばを離れなかった。

「みんな口々に『ぼくたちが帰ったら、パパが寂しいんだよ』と言ってねぇ。『パパ、これからご飯食べていい？』『ジュース飲んでいい？』『ゲームしていい？』とか話しかけながら、自宅にいるように、普段通りの家族の時間を過ごしていました。ただ、どんなにワイワイ騒いでも、話しかけても、息子が起きてこないというだけなの…」（千葉さん）

『そうそう』で過ごした隆史さんは、火葬されるときまできれいな顔だったという。

「冷凍せず、冷たくしてくださっていただけなんですが、顔色が変わることもなく、におうことも一切ありませんでした。スタッフのかたが、毎日丁寧に掃除をしてくださったおかげです。

だから最後の最後まで、息子を抱きしめて『ありがとう』って言えたんです。『あなたが生まれて母親として38年、お母さんとしていさせてくれてありがとうね』って。順番は逆になっちゃったけど、『私が逝くときには、ちゃんと迎えにきてね』とも言いました。

ちゃんとみんな、それぞれにお別れができたから、きっと息子は迷うことなくちゃんと逝けたと思います」（千葉さん）

あれから4か月あまり経ったが、隆史さんの子供たちは、父の大きすぎるシャツを着たりしている。「だって、パパのにおいがするから」と言いながら――

「孫たちも、まだ子供ではありますが、それでも少しずつ大人になったかなって思うんです。長男は『ママをこれから大事にしなくちゃいけないんだ。おれが大事にしなくちゃ』って言っていましたし、いちばん下の子も『ぼく、一生懸命勉強しないとママが悲しむから』って。あの6日間があったからこそだと思うんですよねぇ」（千葉さん）

作家の伊集院静氏は、近著『さよならの力　大人の流儀7』のなかで、こんなことを。

《苦しみ、哀しみを体験した人たちの身体の中には、別離した人々が、いつまでも生きていて、その人の生の力になっています。だからこそ懸命に生きねばならないのです》

こうして千葉さんの話を聞くと、確かにさよならをきちんとできたからこその〝力〟があったと思える。

新 われらの時代に

タブー視はなくなったものの「死」への抵抗感は大きい。〝さよならの思い〟を誰とどこまで共有できるか――

遺体ホテル建設にあたって、前出『リレーション』は、事前に充分な説明会を開き、近隣住民の理解を得られたものの、『そうそう』の近所には、いまだに『遺体保管所絶対反対』の看板やのぼりが複数ある（下写真）。

遺体ホテルを受け入れられない住民がその複雑な胸中を明かす。

「住民説明会は5回ありましたが、そのときにはすでに地主との契約も成立し、営業が流す。同じインドネシアでもトラジャでは、盛大な葬式儀礼の準備が整うまでは、遺体とともに暮らすという。

また輪廻転生を信じるチベット仏教では火葬ののち、骨を山に散骨するので墓はない。死者の名前を口にすることは禁じられ、遺品もすべてその場で競りにかけてしまうため、遺族の元には何も残らない。

「詳しくは知りませんが、北朝鮮の指導者の遺体は現在でも冷凍保存されているはずです。おそらくは、科学的に可能になれば、復活させようという意図であろうと考えられます。レーニンの廟にあるレーニンの遺体は、特殊な薬剤でそのまま保管されていますが、保管の経費が問題になり、今後どうするか決めかねているようです」（梅屋さん）

コスパが優先される現代社会ではあるが、〝さよならの時間〟だけは、簡単に譲っていいものではないのではないだろうか。

「そうそう」の近隣には、こうした「反対」の文字がいまだに‥‥。

遺体ホテルが海外メディアから注目されている理由

『そうそう』の竹岸さんの元には、欧米各国からの取材が多数きている。それは日本が独自の死生観を持っているからだと指摘するのは、神戸大学大学院国際文化学研究科の梅屋潔教授だ。

「海外ではどんな形であれ、宗教をベースに生活しているケースが多い。死者もそれに準じて送るため、遺族への負担は大きくありません。しかし日本では宗教弾圧の歴史もあり、神道は慶事に、仏教は弔事に特化して、私たちの生活に宗教というよりは行事として存続してきました。いざ死者を送るとなったときに、遺族は死者の意向を忖度してその方法を決めなければならないのですが、死者が生きているときに宗教的な関係をあまり持っていないと、困って頼ることになるのが葬儀社です。その提供するサービスの1つが『遺体ホテル』。

海外メディアが取り上げるのは、日本が宗教的要素を徹底的に排し、『ホテル』という生きた人のための施設を名称に用いたことに違和感を抱くのでしょう」

ちなみに日本では火葬が99・9%だが、世界での死者の弔い方はさまざま。イギリスやアメリカでは土葬が一般的だったが、最近は衛生面からの要望で火葬が増えている。

インドネシアのバリなどは、一度埋めてから掘り出し、火葬して、その骨をすりつぶし海に